

新生児慢性肺疾患に対する在宅酸素療法

(分担研究： NICU 退院児のホームケアシステムに関する研究)

竹内 豊* 長谷川 久弥*

要 約

4例の新生児慢性肺疾患の児(気管支肺異形成2例, Wilson-Mikity症候群2例)に対し在宅酸素療法を施行した。4例中3例はすでに酸素から離脱し, 平均開始日齢は358, 平均離脱日齢は549であった。離脱できた3例について2歳までの発育, 発達を検討したところ在宅酸素療法開始前後で発育面では大きな影響はなかったが, 発達面ではよい影響がでたものと思われた。家族の在宅酸素療法に対する評価は概ね好評で, 新生児慢性肺疾患の児に対し在宅酸素療法は十分施行可能であると思われた。

見出し語： 在宅酸素療法, 新生児慢性肺疾患, 発育発達

研究 方法

昨年度報告した適応基準¹⁾に基づき4例の新生児慢性肺疾患の児(気管支肺異形成2例, Wilson-Mikity症候群2例)に対し在宅酸素療法を施行した。症例の内訳を表1に示す。酸素濃縮器としてはハイサンソ To-90 およびマイルドサンソ To-40 (帝人株式会社)を用いた。在宅酸素療法から離脱出来た児について2歳までの, 発育, 発達および家族の在宅酸素療法に対する評価などについて検討した。

結 果

4例中3例はすでに酸素から離脱でき, 1例のみ継続中である。在宅酸素療法平均開始日齢は358, 平均離脱日齢は549であった。酸素から離脱できた3例について2歳までの発育発達に与える影響について検討してみた。発育については個人差は有るものの3例の平均でみみると在宅酸素療法開始前3カ月では月平均311g体重が増加して

いるのに対し, 開始後3カ月では月平均306gと有意な影響は認められなかった。これに対し発達は, 在宅酸素療法開始前には1才近くなってねがえりがやっとできるという状態であったのに対し, 在宅酸素療法開始後には急速な運動発達の進歩がみられ, 2才前には全例一人歩きが可能となった(図1, 2, 3)。家族の在宅酸素療法に対する評価を表2に示す。モニターなどの問題はあるものの全部の家族が在宅酸素療法をやって良かったとしている。

考 察

今回, 新生児慢性肺疾患の児に対し在宅酸素療法を施行したが, 適応基準を満たし, プロトコルに従って施行することにより大きなトラブルなく安全に施行することが可能であった。開始時期が1歳近くなった例が多かったが体重が3kg以上あり, 呼吸循環状態, 哺乳力などが安定していればもう少し早い時期でも可能と思われた。児に与

* 松戸市立病院新生児科

える影響としては発育よりもむしろ発達に与える影響が大きいと思われた。適応基準にそって施行したところ、開始時期は1才前後、離脱時期は1才半前後となり、児の発達にとって重要な時期を家庭で過ごせたことの意義は大きかったと思われる。家族の在宅酸素療法に対する評価としても発達に関する進歩を挙げているものが多く、具体的な数字としては表れにくいが発達面では好影響を与えたものと思われた。パルスオキシメーターに

関しては体動の影響などまだ問題は残すものの、現在のところ家庭内におけるモニターとしては一番適したものと思われ、小児の特殊性を考慮した場合、保険適応となることが望ましいと思われた。

文 献

- 1) 長谷川久弥, 竹内豊, 他: 新生児慢性肺疾患に対する在宅酸素療法の試み: 小児科臨床, 42, 395-398, 1989.

表 1. 在宅酸素療法施行例

松戸市立病院新生児科 (S. 62. 9 ~ 63. 11)

	S. M. ♂	A. I. ♀	M. N. ♀	A. S. ♀
在胎週数	25週2日	33週4日	27週0日	34週2日
出生体重	825g	1006g	720g	4060g
病名	W-M症候群	BPD	W-M症候群	Sotos症候群 BPD
在宅酸素療法開始日齢	378	422	323	308
在宅酸素療法終了日齢	527	631	490	—
酸素濃縮器	ハイサンソ To-90 (帝人)	ハイサンソ To-90 (帝人)	マイルドサンソ To-40 (帝人)	ハイサンソ To-90 (帝人)
酸素供給方法	鼻カテ	鼻カテ	酸素テント	鼻カテ

表 2. 家族の在宅酸素療法に対する評価

良かった点

- 母親以外の家族も育児に参加できるようになった。
- 子供の状態が十分把握できるようになり自信がついた。
- 子供の発達にとって環境がよくなった。

悪かった点

- はじめのうち家庭内で医療行為を行うことに不安があった。
- モニターとしてのパルスオキシメーターに若干の不満があった。

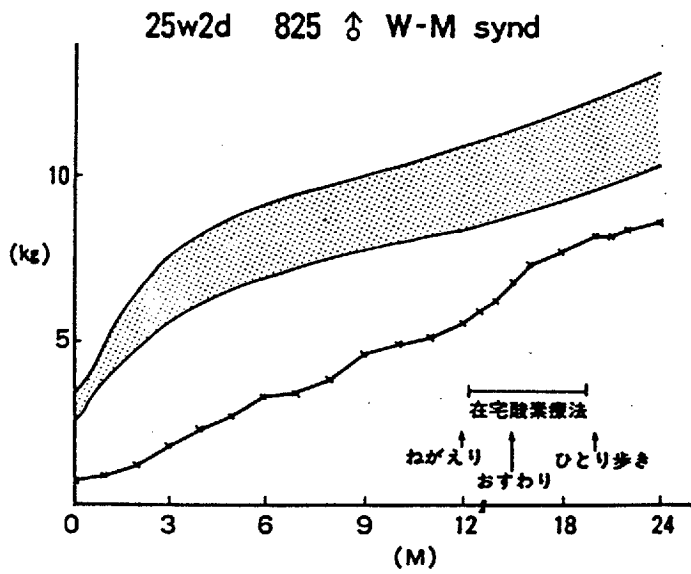


図1.

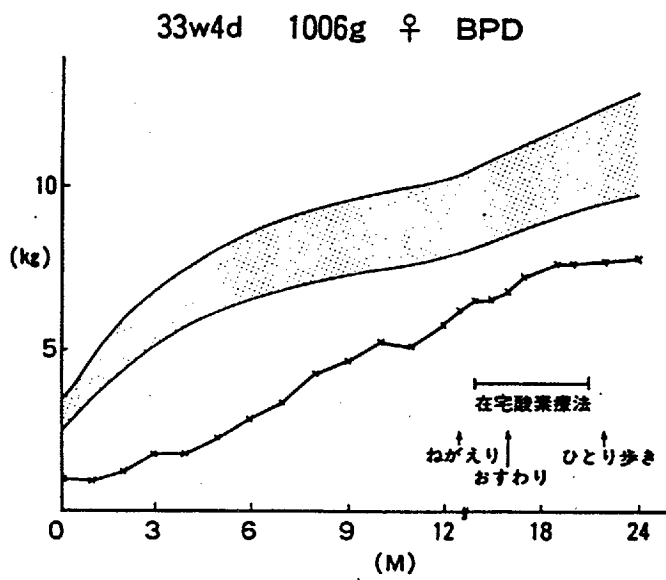


図2.

27wod 720g ♀ W-M synd

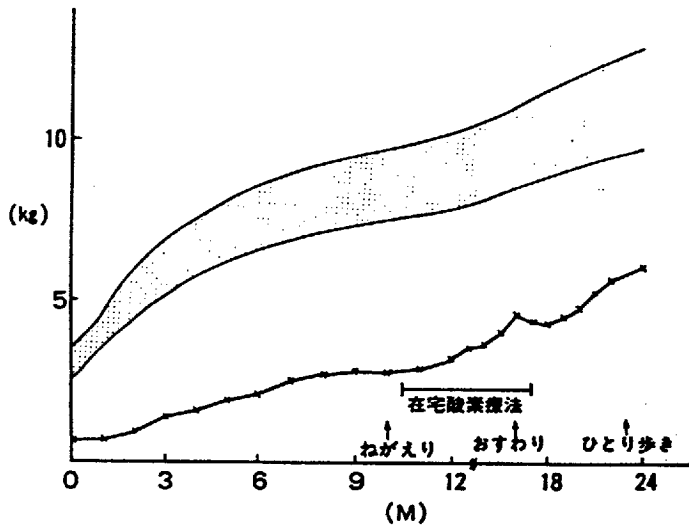
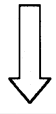
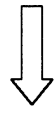


図3.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

4例の新生児慢性肺疾患の児(気管支肺異形成2例, Wilson-Mikity 症候群2例)に対し在宅酸素療法を施行した。4例中3例はすでに酸素から離脱し, 平均開始日齢は358, 平均離脱日齢は549であった。離脱できた3例について2歳までの発育, 発達を検討したところ在宅酸素療法開始前後で発育面では大きな影響はなかったが, 発達面ではよい影響がでたものと思われた。家族の在宅酸素療法に対する評価は概ね好評で, 新生児慢性肺疾患の児に対し在宅酸素療法は十分施行可能であると思われた。